

200年使える住宅・道路

一 百年以上補修を要する住宅や、税制などの側面から総合的な住宅政策を講じて、合理的な検討し、新しい社会主義的住宅政策を講ずる。関係関係は、北九州を基盤、同市若松区、北九州府初め、鹿・宮・なごを候補地に来年から半の代償による「次世代システム研究」が開始される。

研究は、元九州工業大技術に加え、都市建設、建築学などで北九州デクンセンター、北九州府、交通、環境、エネルギーなどの連携を図る。

都市実験 づくりへ 北九州に研究会

北九州府、新日本製鉄、京務入組製鉄所長、井村秀文・九州大学教授(環境社会システム工学)ら約三十人・団体が組織する。

具体的には、住宅や道路などの公共施設、街区などを寿命延長させる。木材とセラミック、石材、鉄などを組み合わせ、土壌で技術的

的には、毎時確保を要する。物づくり企業を中心に北九州地区では技術の蓄積が、ゆとりがあり、企業は活発化も期待している。

住宅の寿命、寿命延長で、都市環境などの改善以上の効果を期待している。

現在、平成二十年「次世代システム研究」の約三分の一を研究費の約三分の一を研究費に充てている。

長寿型の都市づくり具体化

次世代システム研究会設立へ

住宅のほか街路、水路など公共施設の耐用年数を二百年以上にして、資源の浪費を防ぐ長寿命型

環境保全都市の具体化を目指す「次世代システム研究会」の設立発起人がこのほど、戸畑区飛幡町の北九州テクノセンターで開かれた。

実験都市は広大な遊休地がある若松区の洞海湾沿いなどが候補地

に挙がっており、二〇〇二年の着工を目指している。

同研究会は北九州市と環境庁、中小企業庁、九州大、九州工業大、九州国際大、新日本製鉄、アステック入江などの産官学の専門家で組織。建築、

土木、情報通信、行政など環境都市の創造に必要なさまざまな問題を総合的に検討する。

発会式には約三十人が出席。会長には迎静雄・北九州テクノセンター社長、副会長に今村忠夫・九州国際大常務理事、事務局幹事に岡本久人・九州テクノリサーチ地球環境プロジェクト部長を選出した。

研究会は、構想に市民の声を反映するため六月にシンポジウムを開催し、専門家の提言に対する市民の意見などを集約する。そのほか、九月までをめぐりに理論研究会、実証プロジェクト部会などソフト、ハードの八つの部会の具体的な活動計画を決める。



北九州テクノセンターで開かれた「次世代システム研究会」

2001. 4. 12

変化に挑む

⑨

を構える青木は、大分県平
目町役場新庁舎の設計で昨
年、グッドデザイン賞(日
本デザイン振興協会主催)
のエコロジーデザイン特別
賞を受けた。

青木は旧庁舎に近い發達
二十四年のグリーンセンタ
ー(林業研修宿泊施設)に
手を加え、新庁舎により
がえさせた。「あるもの」
をフル活用して、新築の半
額の約四億円で作成させ
た。財政難に苦しむ地方自
治体がいま、公共施設建
設で、青木に注目する理
由。

青木は別の形で、日本
の建築の「常識」を崩さ
んとする勇が福岡市に
福永建築研究所所長の福
永博也。「三百年住居」
を掲げて昨年、同市中央区
大手門に十四階建ての分
譲マンションを完成させ
た。専有面積七十平方
を越える部屋で約五千万
円。「福岡一高いマンシ
ョン」。福永は几帳めかし
て笑う。

子孫に残せる「財産」に



街づくり

百年はもつとされるコ
ンクリート建築物。しかし、
建設業界でいわれる建築物
の寿命は、築後四十二年。
フランス八十六年。日本
三十年。右肩下がりの成
果の中で、日本は「使い
捨て」に近づいてきた。その
結果、福岡市では「コン
クリート」と呼ばれる建
築材料が約七十二万ト(一
九九七年)発生した。二
十一世紀はいよいよ本格
的にビル解体時代に突入す
る。

■既存の建物を再生

十二日、福岡市健康中心
センター「あざな」の
建築家青木茂吉(こはら)は、
百人を超す福岡市役所職員
の研修会に講師として初め
て招かれたのだ。

青木は言う。「都市部の
古い建物を再生させる。福
岡で実験すれば、全国の都
市も変わるはずだ」

青木は別の形で、日本
の建築の「常識」を崩さ
んとする勇が福岡市に
福永建築研究所所長の福
永博也。「三百年住居」
を掲げて昨年、同市中央区
大手門に十四階建ての分
譲マンションを完成させ
た。専有面積七十平方
を越える部屋で約五千万
円。「福岡一高いマンシ
ョン」。福永は几帳めかし
て笑う。

「自分より給料の少ない
イタリア人が別荘を持ち、
生活を楽しんでいる」と福
永は言う。それは世代ごと
に要求されるものはならな
い日本人と、「七世代に」

「街づくり」
「コンクリート」

「三十一、四十年で価値を
失う」

「再生」



時間と人手と費用をかけてできたビル群を「使い捨て」にするか「再生」するかで、街づくりは大きく変わる
—福岡市・天神

「回」(岡本)のイタリア人
との差があった。岡本は住宅
を売った、朽ちない街を
つくった。北九州市や通
産省、建設省などは驚き込
んで動揺した。

「環境」

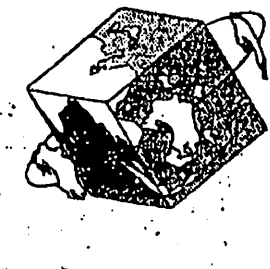
「再生」

「回」(岡本)のイタリア人
との差があった。岡本は住宅
を売った、朽ちない街を
つくった。北九州市や通
産省、建設省などは驚き込
んで動揺した。

「環境」

「再生」

「再生」



「再生」

シリーズ

21世紀の九州経済を探る

第1部

次世代システム研究所新設

環境配慮型の地域開発を実証

H13.7.11 KG A
九州国際大学が14日記念式典



次世代システム研究所が入った九州国際大文化交流センター

九州国際大学は環境配慮型の地域開発などに関する理論構築と実証を行うことを目的に「九州国際大学次世代システム研究所(岡本久人所長、093・661・8772)」を北九州市八幡東区尾倉2の同大文化交流センター内に新設、14日、設立記念式典を開き本格活動に入る。

基礎理論構築 来月、伊・独視察



岡本次世代システム研究所所長

研究所設置の狙いは、北九州市の産学官で構成する次世代システム研究会(迎静雄会長)九州国際大学理事長)が進めてきた「持続可能な社会の実現に向けてのロングライフなまちづくりのための研究などを、実

「社新工場」を完成

パッキン 5種類の紙箱本格生産

の取引先である包装用品卸の東光(東京都品川区)の協力で実現したもので、東光が販売を受け持つ。今年度(2002年3月期)1

証段階まで高める」(岡本所長)こと。

専任研究員は3人だが、プロジェクトごとに全国の大学の研究者を研究顧問や客員研究員として迎え入れるほか、次世代システム研究会会員企業や自治体の関係者も特別研究員として参画する。

当面、ロングライフ・資源ストック型産業社会を構築するための基礎理論の確立を目指す。この一環として北九州青年会議所などとの共催で8月12日から1週間、イタリアとドイツを訪問しストック型社会システムの視察、調査を行う。

併せて、響灘工業用地などでの自然・生物共生システム、スケルトン構造のロングライフ住宅、商店街再生プログラムの開発、小規模分散型地域自律エネルギーシステムなどについての理論構築、実証研究も実施

営資源の希少性を強みに、情報の共有化、職務権限の経営者集中、企業行動の機動性、外部経営資源の有効活用、変革への柔軟性を掌

提供地域を大幅

ドードロ
提供地域を大幅
NTT西日本福岡支店
福岡市博多区博多駅東3
の28、宮崎元胤支店
長)は11日からアロードパ
ンド(高速・広帯域)のイ
ンターネット接続サービス
「フレッツ・ADSL」の
提供地域を大幅に拡大す
る。これに伴い、同日から
サービスの申し込み受け付
けを開始する。

同サービスは2001年3月21日から福岡、北九州両市の一部でスタート、6
り情報
支援制
平均
今年
福岡
福岡
日、会
の20
果を
社の
83社

岡本所長は「産業経済社会を生態学的にとらえた新たな思想を生み出し、北九州市で実証実験を行い、北九州市が真の環境都市になるための貢献をするつもりだ」と語っている。

してはスピードの経済性、ネットワークの経済性、変革の継続性を強調した。自立専門性への革新企業組織の最適化、経営者の

岡本 俊 啓

1/5 新聞

from 5/14

都市

(第3種郵便物認可)

最新素材と工法で「朽ちない街」づくり

200年住宅 構想始動へ

住宅の耐用年数を二百年以上に延ばして資源の浪費を防ぐ「エコエコ実験都市」(仮称)の建設準備に、北九州市と地場企業、大学関係者が着手する。これに必要となる最新素材と工法で、朽ちない街をつくらせて、世代ごとに家を建て替える無駄を減らし、環境保全と同時に豊かさが実感できる社会の実現を目指す。今年三月までに検討委員会を発足させ、二〇〇二年に着工する。

北九州市の産学官 2002年に着工

準備を進めているのは、能という。検討委には、九州工業元九州工業大学長で、中小企業への技術支援をしている北九州市の外郭団体・北九州テクノセンター(戸畑区)社長 迎静雄氏と、環境調査を行う九州テクノリサーチ(同)の岡本久人・地球環境プロジェクト部長、北九州青年会議所など。

構想では、同市の市街地再開発事業に合わせ、住宅や公共施設など街を丸ごと高耐久仕様で整備する。腐食や金属疲労に強い鉄柱を地場企業が開発済みで、現在の耐用年数の七倍に当たる二百年住宅は技術的には実現可能。

家電などの廃棄物をリサイクルする「エコタウン事業」を進め、環境先進都市を模倣する同市は、現在策定中の長期計画「第三次リネッサンス構想」にもエコエコ実験都市を柱の一つとして盛り込んでいる。

【解説】二百年住宅を中心とする「エコエコ実験都市」の建設は、廃棄物をリサイクルに力を注ぐ北九州市の産学官が「資源循環型社会」から踏み出し、資源の消費そのものを抑える「省資源型社会」の構築に挑む意欲的企業による。

二百年住宅は、伐採された熟葉雨木の再生に要する時間。自然の管母に人間社会の消費サイクルを回調させようというもだ。

加えて、生産資金の三分の一に当たる約七千万円を住家や家賃につき平均的な日本人の生活を打破する(二)で、余剰資金を貯蓄して、実質的な豊かさを追求する狙いもある。

「循環」から「省資源」

ただ、次々と住宅を建て替え、数年ごとに道路を掘り返す公共事業を経済成長の糧としてきた社会構造を転換するのが容易ではないのも確か。

それだけに、一國一地域の利害得失を越えた「地球環境の保全」という世界への共通課題を解決する作業も求められる。(北九州支社・都留正伸)